

<特集:東アジア現代文学と「周縁」の言語>

ワリス・ノカンへの手紙

管啓次郎

台湾の地図を見るとすぐにわかることがある
山地は島の東部に寄っているのだ
そこは蝶の土地、鳥と猪の土地
そして土地のことを知っている人たちが住む土地だ

ぼくは知らない、土地を知らない
ばかげた都会の崖っぷちで育ち商品の森で生きてきた
工業製品のように切り売りされる時間にしばられ
愚にもつかない偽物の神話で頭をいっぱいにして

だが三十歳になったときニューメキシコを訪れて
すべてが変わった、自分の人生を
編み上げている数々の線が反乱を開始した
荒野の夕方の光の美しさに目が眩んだ

アコマ、空の村
そこでは水をはじめすべてが欠乏している
その欠乏に抗するかのように
人々は石を積み、雲母の窓をもつ家を作る

夏に訪れる雷雨は大きなチャンス
砂岩の凹みがしばらく使える溜め池に変わり

その水でかれらは生きてきた
そこを拠点として遠い山まで遠征するのだ

タオスは高原の清浄この上ない集落
手を切るように冷たい水の小川が村を分断し
泥をこねた住宅が何層にも重なって
何世代もの生者と死者と一緒に暮らしている

村からは見えない山のむこうに
青い聖なる湖がある
年にいちど村人たちは湖に巡礼する
ぼくはかれらに加わることができない

ナヴァホは北方から南下してきた牧畜民
スペイン人から盗んだ馬を乗りこなして
この大地や牛、羊を誰よりもよく知ようになった
かれらの言語はそれだけで解読不可能な暗号

けれどもぼくの友人のナヴァホは故郷を捨てたナヴァホ
分厚い眼鏡をかけて教育学を学び
深夜に冷凍のピザを食べながら
自殺した友人たちの名を唱えていた

それからぼくはアリゾナにも住んだ
コヨーテが泣き蜂鳥が笑う砂漠だ
都会のふりをしている区域も野生動物たちのふるさと
サボテンの森が国境を越えてどンドン歩いてくる

ヤキはメキシコからの亡命部族
トゥーソンの片隅に小さな集落を作り
かれらが大好きな花をたくさん作り
その小さな庭園を守るようにして暮らす

ある年の春、その復活祭を見た、教会の広場だ
子供たちの聖歌隊がラテン語の歌を朗誦する
マリア像が花ふぶきにつつまれる
白い衣裳の少女たちが美しく行進する

広場の別の一角には四阿があり
木の枝を組んだ祭壇がある
ここで行なわれるのは鹿踊り
鹿の首を頭に載せた男が鹿として踊っている

かれらの村にそっと足を踏み入れた
かれらの祭儀をぼくは見物した
胸が高鳴り苦しいほどだった
だがかれらの暮らしに加わることはできない

土地で生きるとは土地の水で生きること
土地が与える食物と土地の陽光で生きること
居住とはヒトの最大の冒険
アフリカを出てわれわれはそうして地球に住んできた

だが土地の生活を崩してゆくシステムがある
国家だ、政治だ、国際経済という殺人的からくりだ
教育だ、宗教だ、人から考えることを奪うトリックだ

商品だ、金銭だ、人をどんどん無知にする装置だ

この世の胸が悪くなる卑劣さと

自然力のいつも圧倒的な公正さ

生命を与えることにおいても奪うことにおいても

ただ力そのものとして世界をみたく公正さ

こんなばかげた想念で頭をいっぱいにしてるから

ぼくの眠りはいつも犬のように浅い

自分が書く言葉があまりに不自由なので

眠りの中ではいつも金縛り

そして目覚めているとき、ぼくは学生たちに話しかける

東京で、ガラクタと盲従と頽廢の都で、わずかな緑にすがりつつ

だがここにも雨は平等に降る

だがここにも陽光は平等にさす

海岸をわずかに北に行けばそこは福島だ

それを忘れて生きることなんてできるだろうか

東北の長い海岸線のすべてが波に洗われたのだ

それを忘れて生きることなんてできるだろうか

別の春、ぼくは台東から蘭嶼に飛んだ

アリバンバンの島だ、この魚の干物を食べた

男たちが豚肉を切り分けるのを見た

勧められた小米酒で舌を焼いた

そして今年はこちら台中に初めてきた

効率の良い乗り物に魔法のように助けられて
何かを語れといわれて
でも何も語れない、語れる言葉がない

ぼくは五十五歳、無知は変わらない
だがこれからは本当に大切なことだけを語りたい
狼の遠吠えのような真実のひとことと引き換えに
さびしい夜のような沈黙を抱え込んでもいい

もう一度いおうか、人の生活はいつも、どこでも
その場のあらゆる自然力につらぬかれている
こんどはきみが住む土地のようすを教えてください
ワリス・ノカン、こんなことを、きみに話したかったのだ

(SUGA KEIJIRO 管啓次郎)